

# 有明高専

# 図書館報

No.12



## CONTENTS

- 特集 気になる公共図書館…P2～4
- 新任教員推薦図書……… P5～7
- 読書感想文コンクール… P8～14
- 図書館統計…………… P15
- 郷土の文化財・編集後記…… P16

## 巻頭言



# あなたは本との出会い、 どこでしていますか。

図書館長 燃山 廣志

本校の図書館に設置しているAVルームでのPCによるネット検索を休み時間を利用して多くの学生が、利用してくれるようになった。「文学」の提出レポートに出典を明記することを求めるに、インターネットを介しての情報検索が増え、HPのアドレスを列記しているものが目につくようになった。ここに時代の流れを感じる。こうした環境下にある学生一人一人にとって、未知との書の出会いはどこで、どのように行われているのだろうか。

我が身を顧みると、年を重ねる毎に雑務に追われゆっくりと本との邂逅を味わえる心の余裕を失いつつあることを痛感する。書店に飛び込んで未知の書を手にする喜びから久しく離れている。そのかわり増えてきたのが、ネットによる書籍注文である。いちいち書店に出向かなくても程なく自宅や研究室に宅配される便利さは、地方に住んでいる事を忘れさせてくれる。ところが、である。実際に手にして、「これは違う」「どうしてこの本を買ってしまったのだろう」と後悔することが一度や二度ではないのだ。そんな時次のような記事が目に飛び込んできた。

古本でも新刊でも店頭での予想外の出会いがほしい。かつて国際政治学者の岩間陽子さんが、恩師の故高坂正堯氏の思い出を、雑誌「アステイオン」(96年秋号)に書いていた。

ドイツに住んでいた岩間さんが「ミュンヘンは歴史を学ぶにはよい街ですね。趣味の良い本がとりそろえてあるような、中くらいの本屋さんがあるので、ぶらぶらしていて楽しい街です」と言うと、教授は「あなたは運を信じていますね」と答えたという。

高坂氏の考えは、大きな書店でコンピューター検索で調べるのが正攻法ではあるが、中くらいの本屋が好きという人は運を信じているというものだった。「すべての本を読むには、人生はあまりに短く、歴史はあまりに複雑である」と師は語ったという。

確かに本との出会いには運命めいたものがあるようと思う。失恋、入試の失敗、親を亡くしたとき、不思議なことだが、慰めと勇気を与えてくれる本が、いつもどこからか現れる。人と同様、本との出会いも、効率では計れないものがある。  
(2006年9月12日付け朝日新聞【天声人語】)

この一文を読んでいて、学生時代、暇さえあれば、東京神田の古本屋街を終日彷徨していた記憶が蘇ってきた。そこで手に入れた書が今も蔵書の一つとしてある。今思えば何と至福の時間だった事か。有明高専の学生諸君にも、この図書館の蔵書の中に、君だけの、君にしか見つけられない運命的な本との出会いの体験を是非持つて欲しいと心から願う。

特集

## 気になる 公共図書館

本号特集では、気になる公共図書館として、滋賀県にある東近江市立能登川図書館と、近郊の図書館の中から地元の大牟田市立図書館の2館を紹介します。1997年に開館した能登川図書館は、魅力あるサービス内容や、全体に木の温もりを感じさせる家具構成など、全国でもユニークな存在です。今回、実際に能登川図書館を訪ね、感じたことなどを述べています。一方、大牟田市立図書館は、地元の公共図書館として、利用する際に知っておきたいことなどを紹介します。



## 東近江市能登川図書館紹介

昨年の9月、縁あって、滋賀県にある東近江市の能登川図書館を訪問して來た。この図書館を訪れるきっかけになったのは、「有明高専図書館報第11号」(平成17年発行)の巻頭言に引用した毎日新聞「余録」の「自殺したくなったら図書館に行こう」(2005年6月6日付)の記事を読んだことに因る。能登川図書館の館長であられる才津原 哲弘氏に一面識もない私は、公務を割いて快く受け入れてもらえたばかりではなく、3時間余り、この図書館の設立までの、そして設立から今日までの経緯、この能登川図書館の特徴等、本当に心からの情熱あふれるお話を伺う機会を作って頂いた。この一文をもって、まず、この事に厚く御礼申し上げたい。私のこの図書館を訪れた印象として、図書館の建物のすばらしさ、内部の一つ一つにまで気配りされた設備・展示閲覧スペースのすばらしさは言うまでもなく、それは、私の想像を裏切らなかつ

たが、それ以上、この図書館を運営されている図書館スタッフの方々の熱意、図書館とはどうあるべきかを、常に追求されているその真摯さに大変な感銘を受けたことを強調したい。いくら、ハード面が優れても、いや、ハード面が優れていればいるほど、ソフト面で、それを存分に使いこなせる人的資産、その図書館スタッフの一人一人のプロ意識に裏付けられたレファレンスを始めとする図書館利用者サービスの徹底化がはかられてこそ、その図書館が“生き物”として利用者に存在し続けられるのだと、この能登川図書館を訪れて改めて痛感した。秋風の心地よい晴れた日に建つ能登川図書館が、辞去する時には、いつのまにか日が暮れ、館内にやさしい明かりがともり、あたかも、そこだけが異空間に浮かぶ幻の建物のような錯覚を抱かせる、まさしく、贅沢な至福の時間に旅した訪問だった。



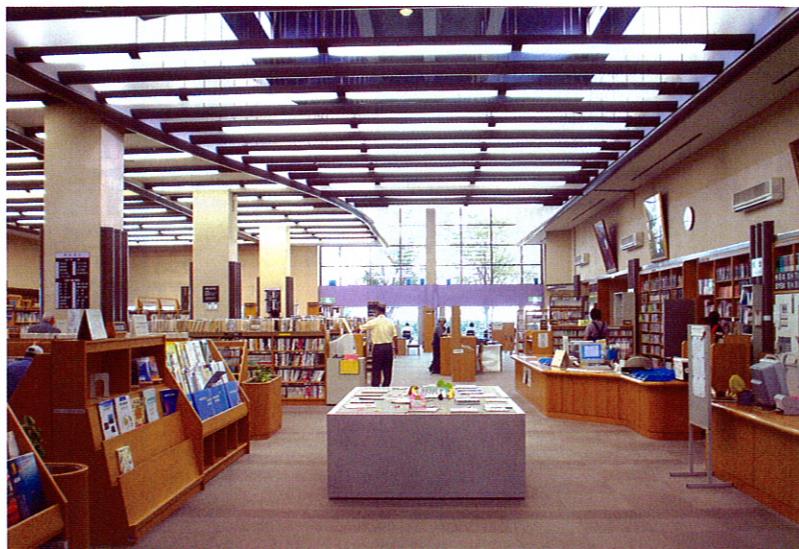
### [能登川図書館概要]

能登川町（平成18年合併して東近江市となる）は、滋賀県のほぼ中央部、琵琶湖の東岸に位置する。豊かな自然と美しい景観に恵まれ、広々とした田園の広がる町だが、京都へはJRの新快速で40分弱の所にあり、京都、大阪の通勤圏となっている。また町境には、安土城址があり、古代からの歴史の豊かな町でもある。

この能登川町に、1997（平成9）年11月に、図書館・博物館の複合施設（4,051m<sup>2</sup>）と、隣接した埋蔵文化財センター（1,574m<sup>2</sup>）の三つの施設からなる能登川町総合文化情報センターが開館した。（能登川図書館館長 才津原 哲弘氏「本物の図書館・博物館づくりを目指して～琵琶湖のほとり、水、緑、人が輝く水車の町から～」（「国土交通」2003年1月号〈第56巻第1号〉）より、要約引用をした。）

この図書館についての紹介文（館内外写真を含む）は、ウェブ「図書館探訪」（HPアドレス <http://www.mnet.ne.jp/dice/observe/index.htm>）に詳しい。興味のある方は、ぜひ併せて閲覧して欲しい。

図書館長 燐山 廣志

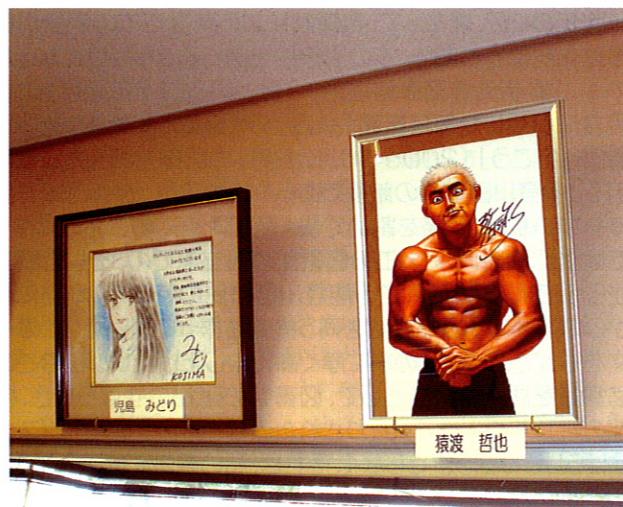
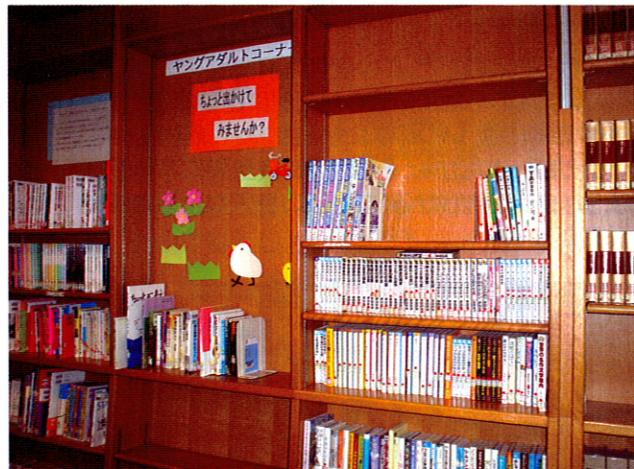


## 大牟田市立図書館

近郊の公共図書館である大牟田市立図書館は、蔵書冊数の豊富さに加え、大牟田駅から徒歩10分ほどのところにあり、利用するには申し分ないといえます。これを機会に足を運んでみてはいかがでしょう。

図書館の入口は、建物2階にあります。中に一歩足を踏み入れると、見通しのよい空間が広がっています。

たくさんの書架が整然と並んでいますが、入口からすぐ左手にヤングアダルトコーナーがあります。ヤングアダルトとは、主に10代の人たちのことをさす言葉で、大人の本はまだちょっと…という人たちが、気軽に楽しめるような本を集めたコーナーです。冒険、ファンタジー、ホラーなど楽しい本が紹介されています。



また、入口から奥までまっすぐ進むと、右側に郷土資料コーナーがあります。ここには大牟田に関する図書、新聞の切り抜き、パンフレットなど数多く置かれていますが、壁には、郷土ゆかりの漫画家の色紙も飾ってあります。有名な漫画家が多いのに、きっと驚かされるでしょう。

館内には、CD、ビデオなどを集めたAV資料コーナーもあり、これらの資料は借りることもできます。さらに、調べものをする際は、辞・事典などが置かれた参考図書のコーナーもチェックしましょう。

ところで、みなさんには、読みたい本を探すとき、直接図書館を訪れて書架に並んだ図書を一冊一冊調べていきますか。それも確かに楽しい作業ですが、時間に余裕がないときは、ぜひ、インターネットを使った蔵書検索をして、予め所蔵があることを確認できた資料に対し、資料番号や請求分類等をチェックして図書館に行くと効率的です。大牟田市立図書館の資料もインターネットで蔵書検索ができますので、利用してみましょう。  
(<http://www.library.city.omuta.fukuoka.jp/opac/index.html>)

読みたい本を借りるときには、図書館利用カードが必要です。本校の学生は、誰でも登録（利用者カードの作成）ができ、即日発行してもらいます。登録する際は、住所を確認できるもの（学生証など）を持参してください。

**休館日：毎週月曜日・毎月最終木曜日（祝日と重なるときは翌日）**

**年末年始（12/29～1/3）など**

**開館時間：通常 午前9時30分～午後6時**

**金曜日 午前9時30分～午後8時（祝日の場合は午後6時まで）**

# 新任教員推薦図書

前号に引き続き、本号では、昨年4月以降に新しく着任された先生方にご自分の印象に残った本や、ぜひ学生に読ませたい本を選んで、エピソードなども交えつつ推薦していただきました。ここで紹介する本は、図書館にも揃えていますので、ぜひ手にとってみてください。



## 古事記と日本人

渡部昇一 著 機械工学科 福田 孝之

国際化が進み日本人が外国人と接する機会が多くなってきた昨今、意外と問題になるのが日本人が日本や日本人のことをよく知らないということである。外国人は必ず「日本とはどんな国? その歴史は?」と聞いてくる。

しかし、戦後の日本人は日本の成立について学校で教えられていないため、答えることはできない。

ところが、日本には日本人が記録した日本の成立についての歴史書がちゃんとあるのである。「古事記」と「日本書紀」(記紀)である。聖徳太子から100年後の頃に、語部により受け継がれてきた伝承をまとめたものが「記紀」であり、国造りの神話から天皇の歴史など記した第一級の史料で、我々が知っている「鶴の恩返し」や「因幡の白兎」、「浦島太郎」などの昔話の元になる話も記されている。

戦後の教育で「記紀」は、非科学的だの皇室側の記録だの言われて無視されているが、実際には神話と歴史を明確に分けて記したり、ある事象について他説も公平に記した

り、さらには皇室の悪い話も多く載せてあるなど、とにかく約1300年前の先祖が、それまでの口伝えの日本の歴史を素直に書き留めたものであり、まず我々はこの記紀を日本の歴史として熟知する必要があるのである。戦後は何故かしら隣国の「魏志倭人伝」を信じ、それに記されている「邪馬台国の卑弥呼」が日本にいたなどと言っているが、「古事記」には「卑弥呼」など一切出てこない。「邪馬台国の卑弥呼」とは、江戸時代の新井白石も指摘しているように「大和國の日の御子(天照大神)」のことであろう。邪馬台国が何處にあったかなど不毛の議論である。

本書はそのような観点から、愛情を持って「古事記」の内容を記したもので、日本人が代々受け継いできた習性や感性の根源を明快に「古事記」から説明してくれている。著者は上智大学名誉教授で英語が専門であり歴史学者ではない。しかし、外国との比較による解説には説得力があり、他にも多数の著書があるがいずれも読むと必ずや気分が豊かになり、勇気づけられ、誇りと希望が湧いてくる。ぜひお奨めである。

- ①二つの祖国
- ②蒼穹の昴
- ③閔妃暗殺
- ④奇貨居くべし

山崎 豊子 著  
浅田 次郎 著  
角田 房子 著  
宮城谷昌光 著

機械工学科 塚本 公秀

最近は伝記が人気がないそうです。私も一人の偉人の自伝より、多くの人々の生き方に接することができる歴史小説が好きです。歴史の教科書は授業での解説無くしては読めませんが(教科書というだけ面白くなくなるかもしれませんね) 小説になっていると臨場感に溢れた演劇を観るよ

うにのめり込めるはどうしてでしょうか。そして習った歴史上の人物名が出てくると特に面白くなってきます。

ここに紹介する四冊の歴史小説は時代の新しい順に並べてあります。①「二つの祖国」は太平洋戦争時、米国では日系人が強制収容されましたが、主人公の日系2世は日本人でありながら米国民として生きることを余儀なくされます。にもかかわらず日米どちらにも理を見出せず、運命と時代の波に翻弄されつづけた彼の心の葛藤が描かれています。

②「蒼穹の昴」は清末期アヘン戦争後の中国が舞台です。

科挙に受かつて宮中に上がり改革の思想に傾倒していく主人公と、宦官として政治の実権を握っている西太后に使えるもう一人の主人公を通して当時の軍事・政治・謀略が繰られています。ここでも教科書に登場した歴史上の人物達が大活躍します。

③「閔妃暗殺」は福岡から二百キロ海を隔てたお隣の朝鮮が舞台です。李王朝末期(明治初期)をめぐるロシアと日本の政策のぶつかり合いが背景です。国王正妃の閔妃(ミンビ)の暗殺事件です。暗殺の首謀者は有名な日本公使のようです。韓国にホームステイに行く学生には事前学習の最適書と思っています。九州にゆかりのある人たちも登場です。

④「奇貨居くべし」は一気に昔にさかのぼって紀元前に初めて中国を統一したとされる秦の建国にまつわる長編ストーリー。諸公子の一人でしかなかった子楚を奇貨と見た商人呂不韋が支えて諸国統一を行わせるという話。人間一人では偉業はなしえないし、リーダーには何が必要かが理解できます。

ところで始皇帝といえば万里の長城。これもお隣中国の名所。一度は見る価値があると思います。



最近は伝記が人気がないそうです。私も一人の偉人の自伝より、多くの人々の生き方に接することができる歴史小説が好きです。歴史の教科書は授業での解説無くしては読めませんが(教科書というだけ面白くなくなるかもしれませんね) 小説になっていると臨場感に溢れた演劇を観るよ

うにのめり込めるはどうしてでしょうか。そして習った歴史上の人物名が出てくると特に面白くなってきます。

ここに紹介する四冊の歴史小説は時代の新しい順に並べてあります。①「二つの祖国」は太平洋戦争時、米国では日系人が強制収容されましたが、主人公の日系2世は日本人でありながら米国民として生きることを余儀なくされます。にもかかわらず日米どちらにも理を見出せず、運命と時代の波に翻弄されつづけた彼の心の葛藤が描かれています。

②「蒼穹の昴」は清末期アヘン戦争後の中国が舞台です。



**①本田宗一郎からの手紙  
②失敗学のすすめ  
③技術者と海外生産**

「失敗するのが怖いんだつたら、何もしないのがいちばんだ。そんな自己滅却な生き方を選ぶもんじゃない。」書店で積まれた数々の本の中で私に強烈に訴えかけてくる帯カバーがあった。そのカバーが付いた本が①である。本田宗一郎は、自動車修理工から町工場を興し、小さな工場をF1やASIMOでおなじみの本田技研工業(株)にまで育て上げた人物である。本書は、同氏が社内報で創業時から述べてきた語録をまとめたものである。本校の諸君が、将来難しい課題に直面したとしても、この本の内容を思い出し、勇気を持って挑戦し続けてくれればうれしい。

②の著者は、大きな事故があるたびに最近TVや新聞に登場し、事故が起こる社会背景や原因について分かり易く解説をしてくれる方だ。新しい挑戦には失敗は付きものだ。本書では、失敗を次に活かすための心

片山 修 編集  
畠村洋太郎 著  
中尾 政之 著

機械工学科 柳原 聖

構えや方策が書いてある。就職して技術者人生を歩むようになる頃にでも一読あれ。

③は、かつて民間企業に技術者として勤務していた著者が、米国へ海外赴任をした時の経験をまとめた本だ。海外での現地生産が恒常化しつつある現在、本校の諸君らも20代から30代にかけて家族を連れて海外へ赴任することが十分に予想される。そのような際に気をつけなくてはならないことが、著者の失敗談を交えて技術者の視線で書いてある。10年以上前に書かれた本のために現地の情報は古くなってしまっているが、異国の生産文化を冷静に見つめる著者の「ものの見方」がきっと参考になるだろう。

以上「挑戦と失敗」をキーワードに三冊を推薦する。「NO TRY、NO GAIN (試行なくして成功なし)」合理性のない挑戦は失敗を生むだけだが、何事においても一步を踏み出さないことには進展はない。みなさんがんばって参りましょう。私も精一杯努力致します！



**①うまくいっている人の考え方  
②1分間マネジャー  
③友よ、科学の根を語ろう**

—思索する若き世代の未来のために—

ジェリー・ミンチントン 著  
K・ブランチャード S・ジョンソン 著  
菊池 誠 著

電子情報工学科 石川 洋平

本は宝です。みんなが就職して給料(手取り)の1/4を本購入に使うことができれば、群を抜いて成長することができます。起業経験を踏まえて、私の推薦する本は以下の3冊です。

①次世代の技術者として最も大切なことは「自尊心を高めて協調性を磨くこと」です。論理的でポジティブな考え方を身に着けたい人にお勧めの本です。

②ちょっと難しい本ですが、物語形式で読みやすく

なっています。「何を示し、どう褒め、どう叱るか！」を学ぶ本です。これから長い人生、人と関わっている時間が大半を占めるはずです。コミュニケーション能力を鍛えましょう。この本は、経営者・先生方にもお勧めしていました。

③これから工学を志す人にお勧めの一冊です。トランジスタの発見から、集積回路への道のりを題材に、「知ることへのあこがれ」が科学の原動力となることを学べます。



**渋沢栄一 人生意気に感ず  
“土魂商才”を貫いた明治経済界の巨人**

童門 冬二著

建築学科 鷲 敏和

企業における社内昇格試験は、概ね主任、係長、課長、次長、部長になる際に実施されます。しかも、部長級となると、筆記試験ではなく、レポート試験になることが多いようです。私の、企業における最後の試験も、「標記の書籍をもとに、組織のリーダーシップについて述べ

よ」というレポート課題が与えられました。

レポート内容の抜粋—渋沢栄一は、「経済の道も、人の道でなくてはならない」といい、終生、道徳と経済の一致を唱え、かつ自らも実践した。渋沢栄一が日本経済の偉大なリーダーであったのは、その力量もさることながら、この「道徳と経済」の言行一致の人物であったからである。また、渋沢栄一は、事業を興す際に四つの尺度を決めた。①正しい事業であるか、②↗

「時運にかなっているか、③人の和を得ているか、④事業主の分にふさわしいか、である。さらに、「事業には信用が第一であり、世間を信用することだ。個人も同じであり、自分は相手を疑いながら、相手には自分を信用せよ」というのは虫のよい話である」と説いていた。すなわち、その偉業は、人との信頼なくしてはあり得なかった。…中略… 最後に、私は、「人の意見や考えによく耳を傾ける、自分の考えを相手にしっかりと説明できる、上司を補佐する能力に優れた、意

見の相違は徹底的に討議する、部下を正当に評価できる、責任感の溢れる人間（たち）が組織のリーダー（シップ）である」と考える。—（これでとりあえず合格しました）

これに限らず、偉人伝の類はたくさんありますし、著者の好き嫌いもあるでしょうが、ある書籍をもとに、自分の考えを整理するという視点で、読書を樂しまれては、いかがでしょうか。



## 大地

パール・バッック 著

一般教育科 小鉢 暢夫

私の19歳は、大学受験に失敗し、浪人生活を送っていました。熊本の某予備校で、朝の7時から夜の7時まで、受験勉強に勤しんでいました。今回は合格できるのかという多少の不安感はありましたが、

2浪はしないという信念で結構充実した日々を送ることができました。そんな浪人時代の中、大学入学試験が終わってしまうと、そこには本当に何の制約もない受験勉強から解放された日々が存在したのです。そのとき何を思ったのか今となってはわからないのですが、

近くの本屋に出かけ長編の小説を購入しては、朝から晩まで読書三昧の毎日を過ごしていました。今回、皆さんに紹介するのは、その中で一番読みやすかった本です。特に感動したとか、人生感に影響を与えたとかいうものではなく、単に秋の夜長あるいは長期休業の間に、読書に耽ってみようというときにお勧めしてもよいのかなという小説です。

高専時代、読書以外にも学生諸君がやるべきことは多いのでしょうが、うまく時間を見つけて、いろいろなジャンルの小説を読んでみませんか。そこには、今まで体験できなかつた新しいものの見方や考え方があるかもしれませんよ。



## *The Periodic Table* by Primo Levi

一般教育科 Richard Grumbine

This book is both an adventure in chemistry and an autobiography by an Italian Jew who lived through the holocaust. Primo Levi is a very gifted writer who tells his often very personal story through the periodic table. The writing style is easy to follow in its English translation and reveals much about human nature and chemistry. Given that the English translation is highly enjoyable I suspect the Japanese translation would be very satisfying too. The account is both highly personal and highly scientific. It is easily accessible and will appeal to a wide variety of readers. It is written in the form of 21 short stories each related to an element of the periodic table. Each story stands on its own and can be read in a single sitting but together they flow chronologically and leave the reader feeling as if they truly know the writer in a very personal manner. The book is easy enough to read on the train but heavy enough to engage your mind long after the last train has stopped. I recommend it to all of our students as it makes the connection between our studies and life in the real world very clear. It also stands out as an example of excellent writing and makes for a very engaging read. Chemistry students in particular should be sure to read this book as it will both inspire them and help solidify the meaning of their studies.

English translation copy write 1984 by Schocken Books Inc.  
ISBN 0-8052-1041-5

平成18年度

# 校内読書感想文コンクール

## 感想文コンクール講評

図書館長 燃山 廣志

今年も、読書感想文コンクールの最終審査を無事に終え、10名の入賞者を公表出来る時を迎えたことに安堵している。ここに到るまでの、クラス担任の先生方、図書館アドバイザーの先生方、そして国語科の先生方の御支援に改めて深謝申し上げたい。

今年は応募総数584篇、その内訳は1・2・3年生が原則全員応募の583篇そして4・5年生は自由応募のためかわずか1篇であった。例年4・5年生の応募は多くはなかったが、今年のような極端な減少に少なからず衝撃を受けている。思索の、より深まる年代の学生諸君の思いが聞かれなかつたのは寂しい。次年度の上級生の本コンクールへの積極的な取り組みと応募数増加に希望をつなぎたい。

第3次審査にノミネートされた37編中、最終審査で入賞を果たした10篇の作品を読み終えての所感を以下に記す。

上述のように上級生の応募が極端に少なかつたため、入賞者全てが1・2・3年に限られてしまった。その中で、今年の特徴として1年生の健闘が目立つ事があげられる。そして入賞作品10篇中2篇が、太宰治著の『人間失格』を選んでいることに注目してみた。このことに対し、私見に過ぎないが、いささか頁をさきたい。

私自身、この『人間失格』の著者である太宰治に、学生時代、当時の若者の例にもれずのめり込んだ体験を持つ。とりわけこの『人間失格』の葉蔵の自己告白と、我が身を照らし合わせ、自身の欺瞞に満ちた生き様を自虐的に責めたものである。そしてそれから時を経て、太宰治という作家とある意味で訣別が出来てしまうと今度は、逆にその太宰治の文体から醸し出されるものに心理的な乖離を実感して現在に至っている。その太宰作品に今の本校の学生が心を寄せ、共感を抱くことは自分自身もそうであったように大いに肯定出来る。しかし、どうも今の学生と過去の自分自身の太宰作品への寄り添い方にズレが生じているように思えてならないのである。“時代が違う”と言えばそれまでだが、『人間失格』の中で語る葉蔵の告白の中に見た、恥部を公にさらされたようなあの赤面てしまいそうな衝撃は、今の学生の所感文には見出せない。むしろ今の若者の心中の一端を葉蔵が体現している、そのことへの共感が根底にあるのではないかとの印象を受ける。自虐的にまで自分を押し殺し、他の人に「道化」を演じ続ける葉蔵の姿に、今の学生はすんなりと自己同化出来ているのではないか、そんな印象が強く残る。そう思うと、昨今、日々のニュースの中で、若者の心の闇の深さを想起させる事件が大きく取りあげられる事が続いている状況下において、『人間失格』の葉蔵のような生き様の中に、今の日本の若者のそれと重なるものがあるとすれば、そこに秘められたある大きなものの根底に流れる何かが今改めてこの作品より提起されているのではないかと、そう思えて来た今年の審査所感であった。

入賞者

■最優秀賞	物質工学科 3年	小田奈津姫	『地獄変』を読んで
■優秀賞	2年2組 建築学科 1年	荻島 光 江藤 紅音	『鼻』について 『人間失格』を読んで
■佳作	建築学科 3年 建築学科 3年 2年3組 2年3組	江崎ひかる 宮下いづみ 柿原 隆宏 古賀可奈子	『人間失格』を読んで 『こころ』を読んで 『見知らぬわが町』 『海と毒薬』と私
	電気工学科 1年 建築学科 1年 建築学科 1年	松尾 衡 牛島 由夏 河田 昂希	『夏の庭』を読んで 『アンネの日記』を読んで 『ビルマの豊饒』

# 入賞作品紹介



## ■最優秀賞

### 『地獄変』を読んで

3年 物質工学科 小田奈津姫

人は生きながらにして地獄を見ることが出来るのでしょうか。愛する娘がもだえ死ぬ様を見つめ続ける事は、まさにこの世の地獄です。娘の死を目の当たりにすることで、良秀はすばらしい地獄変を創りあげ、芸術を追究したのです。

良秀は、高名な絵師で横柄で高慢な一面と、一人娘の事となると人間らしい情愛のある一面を持っていました。物語の中に、良秀と名付けられた一匹の猿が登場します。この猿が、良秀の娘に対する愛情や、唯一の人間らしい部分を表現していたのだと思います。

地獄変を描く時、彼は本当の地獄を見なくては完成させることはできないと感じていたのでしょう。その地獄とは、愛する娘を目の前で亡くす事でした。燃えさかる炎の中でもだえ苦しむ娘を、ただ見つめることしかできなかつたのです。しかし、その炎の中に良秀とあだ名された猿が飛び込みました。その猿こそ、良秀の人間らしい部分、娘に対する愛情の象徴だったのでしょう。猿が娘と一緒に死んだ時、良秀の人間らしさも死んでしまったのです。

良秀は、生きながらにして本当の地獄を見ました。その

代償として、唯一の人間らしい部分と娘を失ってしまったのです。

語り手でもある「私」は「一人娘を先立てたあの男は、おそらく安閑として生きながらえるのに堪えなかったのでございましょう。」と語っていました。しかし私はそうは思いませんでした。人間としての良秀は、猿が炎に飛び込んだ時に猿と一緒に死んでいます。地獄変を完成させた良秀は、人間としての生きる意味を見出すことができなかつたのだと思います。

今までして地獄変を完成させなければならなかつたのでしょうか。何かを得るためにには、何かを失つていかなければならない。人間の不器用さを感じました。

『地獄変』では、良秀の人間らしい面と、芸術を追究する絵師としての面が描かれています。その二つの面は混在することが出来なかつたのです。

私たちの中にも、混在することの出来ない感情は存在するのでしょうか。日常の中で無意識のうちに天秤にかけられている感情が、もしかしたら自分も知らない自分が居るかもしれません。

『地獄変』を読んで、人間の持つ多面的な感情や、その光と陰について深く考えさせられました。



## ■優秀賞

### 『鼻』について

2年2組 萩島 光

芥川龍之介といえば『羅生門』など主に短編小説を書き、多くの傑作を残した文豪である。古典からヒントを得た作品が多く、この『鼻』という小説も『今昔物語集』を題材とした王朝物といわれる作品だ。夏目漱石にこの『鼻』を激賞されたことが、作家として文壇の地歩を占めるきっかけとなつたようだ。

池の尾の高僧、禪智内供は、人並み外れた長い鼻の持ち主で、その鼻ゆえに傷つく自尊心に苦しんでいた。さまざまな手を尽くした末ようやく鼻を縮めることに成功するが、前にも増して人々の冷笑を買ってしまう。それから幾日か過ぎたある夜に、鼻は水気を含んで元通り長くなってしまうが、内供の心はかえって晴ればれとするのだった。

短編ならではの読後の後味の良さと、自然なユーモアと、簡潔で整った文章がとても見事だ。非常に受け入れやすい作品だと思う。

この話の中で、内供はしきりに他人から自分がどう見られているかを考えている。長い鼻に苦心していることを人に悟られないように振舞ったり、鼻が縮んでからも人に笑われることに頭を悩ませたりしている。他人の目ばかりを始終気にして、結局は対世間にしか人生においての価値を見出せない、という人間のわびしさを表しているのだと思う。これは古典に取材したものだが、非常に現実的なテー

マだ。実際に、周囲と自分が異なることを恐れ、体裁よく見えるように振舞うことがあると思う。それで窮屈な思いをしたとしても、世間体を取り繕うことに気をとられてしまう。複雑な心理だが、誰でも持ち得るものだろうと思う。そして、この話の中で特に印象に残つたのは次の文章である。

「人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論誰でも他人の不幸に同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこっちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人と同じ不幸に陥れて見たいような気にさえなる。そうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に対して抱くような事になる。内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。」

傍観者の利己主義、これを人から受けているのに気づいた時どうするか。私は色々と体験してきた。ある成長段階において、以前の醜い自分から一つ脱皮しようと試みる。すると傍観者からの消極的敵意が感じられる。この作品では元の姿に戻ることで晴ればれとした心もちになるが、その逆に、過去や周りの目、嘲笑に明るく立ち向かい進化することもできる。いかなる自分であっても価値を見出せるような気概を持つことも大事だと思う。



## ■優秀賞 『人間失格』を読んで

1年 建築学科 江藤 紅音

「葉蔵」は現代社会を生きる子供たちと、とてもよく似ていると思う。

この作品が発表された当時でこそ、彼（葉蔵）はどんな底に落ちた人間だと思われたであろうが、しかし今の世の中には彼のような人間がひしめき合っている。自分を偽り、他人を欺き、結局は本当の自分までも見失ってしまうような人間が…。そしてそれは、ちょうど私たちぐらいの年齢の子供に多い。思春期で心が揺れ動く時期に、親や友達などの理解を得られなかつたり、少しでも自分を否定されたりすると、人間不信になり全てに対し心を閉ざしてしまう子供が最近増えている。本心では他人から理解されたいと思っているのに、それをうまく表現できないためますます周囲から隔絶されていく。そうして子供たちは自分の存在を主張する最後の手段として犯罪を選ぶのだ。葉蔵も子供たちもやりたくてやっているのではない。それがいけないことであるなどということはよく分かっている。しかしそうすることでしか周囲とつながっていられない。彼らにとっては自己防衛に近いのであると思う。

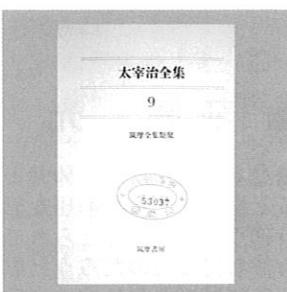
手記中で葉蔵は「互いに欺き合って、しかもいずれも不思議に何の傷もつかず、欺き合っている事にさえ気がついていないみたいな実にあざやかな、それこそ清く明るくほがらかな不信の例が、人間の生活に充満しているように思

われる」と述べているが、確かにそれは事実であると思う。人間の世界では、さんざん親しくしておきながら裏では互いを貶し合っているなどということはざらにあるものだ。でもそれは、私たちが「人間」で、感情を持ち合わせて以上は、避けられないことではないか。それを分かつた上で、どこまで相手を信じ、自分をさらけ出すことができるかどうか、大事なことはそこではないだろうか。

最初のうちは例えそれが「偽」によって構成された関係だったとしても、その中で少しづつ互いを理解することができて、一瞬でもその関係に安堵感を持ち、居場所を見つけられたなら、それは自分にとって無意味なものから確かに意味を持つ「真」のものへと変わって行くであろう。そういうやって人間関係は作られていくものだと思う。

人間不信になってしまった人は本当は、他人を信じられないのではない。他人を信じようとする自分の心を信じられないにいるだけなのだ。誰からも理解を得られないのなら相手を納得させるまでとことん自分を伝えればいいし、自分を否定されたのならその理由をじっくり考えればいい。どちらも自分ときちんと向き合えばできること。それができるなら人間不信になることはないと思う。

希望に満ちた人生を送るのも、人間不信に陥り絶望的な人生を送るのも、要は自分の気持ち次第なのだ。葉蔵の人生から学んだことを、今後の私自身の人生にも生かしていきたいと思う。



## ■佳作 『人間失格』を読んで

3年 建築学科 江崎ひかる

有名な作品だから、粗筋は控えて問題ないだろう。選んだ理由さえも普通の学生と同じよう、只『人間失格』といういかにも哲学めいた題名に惹かれたからだ。

この作品に対する感想を正直に書く。

時々考える。人間らしい、とは何か。誰かが人間はボリス的動物だと言ったが、私は社会集団なんか大嫌いだったので、そんな集団に入らないと生きられないなら、人間ではなくていいと思った。もう一人は、人間は考える葦である、と言ったが、私は考え方をよくする方だったし、考え方をもたない人形にはなりたくなかったので、人間でよかつた、と思った。それでも、あと六十年もしたら死ぬだろう。・・・結局私が言いたいのは、人間の定義が自分に当てはまり、自分が人間だと証明されたとしても、すぐ死んでしまう。人間なんて「そんなモノ」だという事だ。

さて、私は、葉蔵に似ていると感じる部分がある。性格である。他人への恐怖を隠し、もう一つの自分を造るという点である。とにかく恥をかくのが嫌で、いい人になろうと思うが、偽善を見抜かれて・・・という思考を続ける事。怖くてたまらない感覚。葉蔵が友達にそれを見抜かれた瞬間、私も冷や汗が流れた。さらに告白すれば、もう一人の自分といういは、前段落のように、「人間なんてそんなモ

ノ」と優等生ぶっている自分だ。本当は誰よりも独創的でありたくて、「そんなモノ」になりたくない醜い自分がいる。その上、だから私は普通から抜け出す為に、「もう一人の自分」と、いかにも独創的な人間風なステータスを自らつけたのだという事をも知っている。さて、この話には「葉蔵は神様みたない子でした」というような事が最後にある。私が思うに、本当は葉蔵も私のように「ただの普通のいい子」で、独創的な「もう一人の自分」なんか、わざとステータスに加えたモノなのではないかと・・・。最後に太宰がつけた一文にそんな意味がもし込められていたとしたら、彼が気についていたように思われる「罪」とか「神」とかは、自分の奥にひそんでいる醜く弱く衰弱しきった自分への戒めだったのかもしれない。そういうものに押しつぶされた彼は、結局自らを「人間、失格」と評した。そうする事で罪に満ちた彼の人生でも美しく潔く終われるのだろう。けれど、私はその言葉に不信を抱く。『失格・・・資格を失うこと』人間の資格なんてあっただろうか?ないだろう。多くの人がそうしたように、只、生まれて育って、いつの間にか人間になっている。だからない。どんな人生だろうが、失格する必要は。社会<ボリス>の中で生きられず、考えすぎた葦になってしまった、自殺した太宰よ。私はボリス的動物にも考えるだけの葦にも「そんなモノ」にもなりたくないから、まだまだ「人間」として、それから抜け出すために闘っていきたい。



## ■佳作 『こころ』を読んで

3年 建築学科 宮下いづみ

大きく三つに分かれたこの物語の最後の章に私はとりわけ興味をもった。この章では「先生」と呼ばれる人物の遺書という名の回顧が記されている。

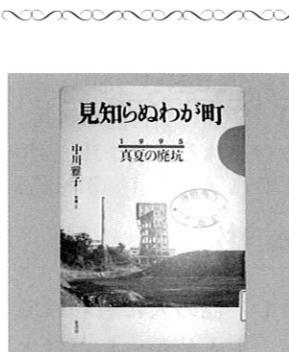
彼の回顧とは簡単に言えば恋愛についてだ。しかし、その一言に集約することなどできはしないだろう。なぜなら、そこには友への裏切りがあり、友の死があったのだ。

その友はこの物語の中で「K」と記されている。Kという男は簡単に説明すると実家から勘当された青年だ。医者になるよう養子に出されたにもかかわらず、彼はそれを良しとはしなかった。自分の選んだ道を精進することを目指したのだ。果敢な男だと言えるだろう。だが、私には単なる融通のきかない人間にしか思えなかった。実際、Kは「お嬢さん」という女性に恋をした時も、恋を取るか精進する道を選ぶかで至極悩んだ。普通の人なら、精進する道も恋する道も両方掴み取ろうとするだろう。だが、Kにはどちらかしかなかった。それほどKにとって精進することは大きな意味を持っているのだ。

そんなKも、お嬢さんに対する気持ちを相談した。それが先に述べた「先生」であり、この遺書の中では「私」と

書かれている人物だ。もし「私」がお嬢さんに対して何の感情も抱いていなかったのならばKの人生の転機ともいえるこの気持ちを素直に祝福できただろう。しかし、「私」もお嬢さんに思いを馳せていたのだ。そして「私」はKには内緒でお嬢さんに気持ちを打ち明け、二人は結婚することになった。何という裏切りだろうか。Kにとっては恋も友情も一度に失ったようなものなのだ。恨んでも恨みきれないのが常だろう。

しかし、Kはそれを自分の死という形で終わらせた。決して「私」を憎んだわけではない。精進する道を選ぶことができなかつた薄志弱行な自分に嫌気がさしたから自ら死を選んだのだ。だが、本当にそうだろうか。私にはどうしてもそろは考えられない。お嬢さんに対する恋も、裏切りという形で「私」という友も失ったKは勘当された時と同じ、また独りになったのだ。人は独りでは生きていけない。幸せな時間も空間も失ったKに残ったものは孤独な精進への道だけであり、その道さえ一度でも疑ってしまったKにはもはや何も無いのと同じだろう。だからこそ死を選んだのだ。Kのとった死という行動は、今まで精進する道をひたむきに進んできた、いわばKにとって最初で最後の我が儘なのではないだろうか。



## ■佳作 『見知らぬわが町』

2年3組 柿原 隆宏

この『見知らぬわが町』を読んで、今まで自分が持っていた三池炭鉱のイメージが覆された。炭鉱が栄えた大牟田、いや、炭鉱で栄えた大牟田といつてもよいほど炭鉱が存在したことに対して誇りを持ち、明るいイメージを持っていました。また炭鉱は、石炭を掘り出せば掘り出すほど人の生活が豊かになるものだと思い込んでいた。しかし、現実はそうではなかったのだ。囚人強制労働・坑内暴動事件・朝鮮人強制労働・炭じん爆発など、さまざまな炭鉱の裏の顔があったのだ。この本を読む前までは全く知らず、大牟田市民として地元のことはきちんと知っておくべきだと思った。古い建物を見ても、これまで何の建物だろうとなにげなく見ていた。しかし、この本の著者に出会い、自分に足りないものは、疑問に感じたこと・ものに対しての対処の仕方であった。

一九九五年七月九日、何げなく散歩に出かけた著者は不思議な形の建物を発見した。コンクリート造りの直方体の土台の上に、金属を組み合わせて作った塔のようなヤグラが著者の探求心をくすぐったのだ。この日から約二ヶ月に及ぶ廃坑巡りが始まった。古い建物の正体を明らかにするために、母に止められながらも自ら進んで荒地に足を踏み入れたりした。予想外の事態が起こっても探求心を捨てずに、さらに追求していく。自分と同じくらいの女子高校生

でありながら危険を覚悟して、正体を突き止める姿には見習うべき点があった。

この本を読んで一番衝撃を受けたのが、「三池工業高校は、元三池集治監だった」ことである。それを知りゾッとした。また、囚人達の労働時間は一日十二時間で、坑内に一度入れば食事をとれなかったことも知り、いかに人手が必要で囚人への対応が厳しかったのかがわかった。また、拷問には窄衣が使われ、皮の性質を利用して呼吸をできなくさせるような残酷な責め具等も使われたそうである。そのため自殺をする者も少なくなかったと言われている。このように強制労働を強いられた囚人は、どのような思いで労働していたのだろう。

著者が本文中にも書いているように、炭鉱に関係のある建物やものが、どんどん取り壊されている。宮浦坑跡は現在、公園となり保存されているが、他の坑跡は、いつ壊されるか壊れるかわからない。

この本を読んで炭坑に興味がわいた。今の大牟田があるのも、炭坑があったからこそだと思う。また、炭坑の裏の顔である事故や囚人強制労働のことを市民はもちろん、全国民も知っておくべきだと思う。そうすることにより、少しでも炭坑で亡くなった人達を慰めることにつながるのではないかと思う。

この本と出会ったのも「めぐりあわせ」。炭坑に対して無知な自分に興味を持たせてくれたのも何かの「めぐりあわせ」であると思う。



## ■佳作 『海と毒薬』と私

「どうしてこんなに共感できるのだろう。」

それが、この本を読んだ後に一番に感じた思いだった。

この本を読む前、私は、米軍捕虜の生体解剖事件という恐ろしい行為を行った医師とはどんな人物だったのかを考えていた。幼い頃から残虐な行為を繰り返していたのだろうか。それとも、人一倍命を大事にし、正義感の強い医師だったのだろうか、と。しかし、私の予想に反して、彼は至って普通の人間であった。色々な思いを抱き、迷ったり苦しんだりする姿は、むしろ自分に通ずるところもあった。

病院で死なない人は空襲で死ぬ、という程、死の多い世の中で、勝呂は病院の研究生として勤めていた。患者は出世のための道具のようなものとして扱われる病院。罪悪感を感じる事ができない友人。その中で勝呂は、研究生の自分の意思だけではどうしようもできず、上の指示に従うしかないという事もある事を知る。そして勝呂は決して逃げられない波に押し流される様

にして、米軍捕虜の生体解剖に第三助手として参加する。

もし私が、勝呂と同じ立場に立った時、果たして私は本当に参加を断る事ができるのだろうか。その黒い波の流れにあらがう事はできるのだろうか。

私は幼い頃から積極的に自分の意思を伝えるのが苦手で、意見を上手く伝えられた事はあまり無い。しかし、この様な命に関わる重要な選択には、人の意見に従わず、きちんと自分の意思を伝えるだろう。

だが、もし私が勝呂と同じ様にあの病院に勤めていたとしたらどうだろう。患者が死んだ事に何の悲しみも抱かないあの病院にいれば、きっと私は人の死について悩み、空虚な思いを持つ事になるかもしれない。結果、生体解剖に参加し、その後勝呂の様に激しく後悔することになったのかもしれない。

私の人生はまだ長い。将来、私は何度も何度もこの黒い波に襲われることになるかもしれません。その度に私はどうしてこうなったのだろうと悔やみ、いつまでも忘れる事ができないと思う。けれど、そんな思いをしながらも生きていくことこそが、普通の人間として生きていくことだ。私はこの本を読んでそう思った。



## ■佳作 『夏の庭』を読んで

1年 電気工学科 松尾 衡

『夏の庭』を読んで「死ぬ」ということについて考えを持ちました。死んでしまった人はどうなるのか。死を目の前で体感したときの恐怖。その中には今後生きていく中で、必要な物になったと思います。

物語の内容は、友達が葬式での事を言い、「死」に対して興味をもち、その結果近所に今にも死にそうなおじいさんを観察していく物語です。読み始めた最初の方の心情は、なんてひどい物語なんだ、と思いました。しかし、読み進めていく事に、温かい感じもしてきました。それは、老人と触れ合っていくことで、学校や塾では学ぶことのできない生きていく上で大切なことを教わっていき、子供達の気持ちが変わっていったからです。人が死ぬ瞬間を見てみたいという好奇心から始まったのが、だんだんと子供達の心情が変わっていった素直な気持ちに感動しました。

物語の終盤に、小説家になりたいという主人公が、

「忘れられないことを書きとめて、他の人にもわけてあげたらいい。」と言った所が、主人公が少しだけ大人になった気がしました。老人はそのとき、きっとそれしかったんだろうな、と思いました。子供達三人は、すごく個性豊かで、老人の話を聞き、これからゆっくりと自分自身の道に歩んで行くことができるようになったんだろうな、と思いました。子供達の将来を予感させるような物語でとても良かったです。

この物語を書いた筆者は、何を伝えたかったのだろうか。それは、「死」という物が、ただ悲しむべきもの、怖い物だけでなく、人の命の終わりに、自分の人生にどう意味づけていくか、ということだと僕は思います。主人公や、子ども達が考えたことは、老人の死を見て、いつかは必ず体験する死について、怖さを感じたと思います。しかし、その死は、その一瞬にあるものではなく、とても長い人生の中の最後にあるものです。子供達は、老人と触れ合ったことで沢山の思い出と、死んでいった悲しみから、生きることについて知っていくんだと思います。



## ■佳作

### 『アンネの日記』を読んで

1年 建築学科 牛島 由夏

私が『アンネの日記』に出会ったのは、十二歳の時。戦時中の少年少女が、どんな気持ちでいたのか、少し気になったからだ。

自分がいつ死ぬか分からない状況で生きていた彼女には、緊迫した一日一日がとても苦痛であつただろう。それゆえ、アンネにとって、日記とは、そうした不安を紛らすためにも、なくてはならない存在だったと思う。

日記からは、隠れ家の生活の大変さが、よく伝わってくる。簡素な食事、流すことのできない水洗トイレ、閉めきったカーテン。私と同じ年頃の女の子が、そんな生活を強いられていた。日記にある、一つ一つの言葉を思い出す度に胸が痛む。

しかし、自由を奪われたアンネ達の痛みやつらさは、

経験という形でしか分からぬ。だから、戦争の時代を生きてきた人、アンネのように、不運にも亡くなつていった人達のメッセージを、私達はもっと知る必要があると思う。

この日記を読んでから、私も時々、日記を書くようになった。いろんな出来事を書き綴っていくうちに、ふと思った。「私はこうして、毎日地面を踏んで、たくさんの体験を綴っていくことができる。だけど、アンネは外の地面に足を着けることさえできなかつた。それでもアンネは、限られた空間の中で、数限りない発見をしていった。彼女は、自分の置かれた状況を素直に受け止め、ポジティブに生きようと努力していたんだな。」と。

生き延びることに最後まで希望を持ち続けた少女、アンネ・フランク。日記を通して、私達に、まだ平和とはいえぬ今の世の中を、生きていく勇気を与えてくれた。そんな彼女へ「ありがとう」を言いたい。



## ■佳作

### 『ビルマの豊饒』

1年 建築学科 河田 昂希

今まで人類が犯してきた数々の過ちの中で、一番反省すべきもの、それは戦争です。国の為、天皇の為、自分の命捨てても相手の命を奪う。そんな戦争のせいで、どれだけ沢山の尊い命が失われたことでしょう。

しかし、辛い思いをしたのは、町の人々だけではありません。銃を手にし、国の為、天皇の為と、戦わされた人々、戦争にかり出され、日本軍の兵隊となつた人々こそ、僕は一番辛い思いをしたのではないかと思います。なぜなら、日本軍となつた人々は、「生きたい」という考えを持つことが許されなかつたからです。それは、「戦死することが國の為。そして兵隊の義務だ。」ということを意味しています。

僕はこの考えが何よりも許せません。いくら國の為とはいえ、死ぬことが正しいなどと言う事はありえないからです。「生きる」ということは、僕たち、生きている人間の義務なのです。

その、歌う部隊の隊長はこう言いました。「生きよ

う。生きて帰って、みんなで日本の復興の為に働く。だから皆、希望を捨てるな。」

この言葉がどれだけ他の兵隊を励まし、勇気づけしたことでしょうか。僕はこの隊長の言葉があつたからこそ、この言葉によって失いかけていた生きる希望を取り戻せたからこそ、この歌う部隊はまた日本に帰ってくることができたのだと思います。そして、死ぬことが國の為だと考えられている時代に、一番に生きる希望を持ち、皆に訴えた隊長はとてもすばらしい人だと思います。

戦争は、人々から生きる希望を奪い、多くの命まで奪つていきました。それはとても悲しいことです。しかし、悲しいということだけ考えていてもなにも起こりません。まさに、この隊長のように、悲しみを乗り越えた上で、これからどう生きていくか、生きていくべきかを考えることが大切なのです。そうすることで希望を見つけ、手に入れることができます。そしてその希望こそ、今も昔も変わらず、僕たちが生きていくのに持つていなければならない希望なのです。

## 審査員講評

### 機械工学科 岩本 達也

一人一人、モノの考え方は違いますよね。本を読んだ感想もまた違います。たとえ、同じ作品に対する感想文でも、ひとつとして同じものではなく、一人一人の感じ方・考え方の違いが見えて、大変興味深く読ませていただきました。なかには、その本を読んでみたいと思わせるような作品もあり、皆さんの文章力に驚かされました。

読書感想文で大切なことは、素直に自分の考えや気持ちを書くということだと思っています。感想文を書いているはずなのに、あらすじを書いている人はいませんか？入賞作品には、特に素晴らしいものが揃っていますので、ぜひ読んでみてください。

### 電気工学科 塚本 俊介

審査のために毎年、感想文を読ませていただきながら、学生諸君の感受性を楽しんでいる。

ところで、指定された50冊の本のなかで、多くの学生が選ぶ本のひとつに、湯本香樹実作の『夏の庭 The Friends』がある。映画化もされたこの本は、少年たちの気持ちの変化が面白いし、ボリュームも長すぎず短すぎずであることが、多くの学生に受けているのかもしれない。またもうひとつ、読後感が素晴らしいのも人気の素だと思う。老人とのふれあいの中で変化していく少年たちの気持ちが、そのまま学生たちの心を揺り動かしているに違いない。しかし、この作品を選んだ人が、過去一度も“最優秀賞”に選ばれていないのは不思議だ。あまりにも多くの学生が描写するので、インパクトが小さいであろうか？

### 電子情報工学科 松野 哲也

今回、はじめて読書感想文を読む機会を持ちました。文章作成に取り組む姿勢にかなりばらつきがみられました。推敲をどの程度行ったのでしょうか。書きなぐったままではないかと思われるものから何度も検討を重ねたことが伺われる作品まで様々でした。ただ、何かを伝えようという熱意は多くの作品から感じられました。表現力は読書量に比例します。皆さんの今後の努力に期待します。

### 物質工学科 藤本 大輔

コンクールの審査員をさせていただいたのは今回初めてだったので、内心ワクワクしながら読ませていただきました。良い感想文も、そうでないもの(あらすじしか書いてないものが多かったのが残念です)もいろいろでしたが、中には課題になった本をすぐにでも読みたくなるような、すばらしい感想文もありました。惜しくも受賞を逃した皆さんも、来年は入賞できるようがんばってください。

### 建築学科 上原 修一

40編近い作品を読みましたが、力作が多く選定に苦労しました。日頃の授業では、物足りなさを感じることが多いですが、予選を通過している作品とはいえ、3年生以下（今回はすべて3年生以下）の学生が、各作品についてこれほど深く考察していることに、感心しました。賞にもれた作品以外にも、力作が多かったと思っています。

一方で、誤字が多いことも気になりました。すばらしい文章でも、誤字があると印象がずいぶん変わります。日頃から、辞典で確認するなど、注意したいものです。

### 一般教育科 三戸 健司

背伸びをして書いた感想文の味気なさに比べ、自分の気持を自ら湧いて来る言葉で素直に書いた感想文は、読み手に少なからぬ感動を与えてくれます。今回最終審査に残った作品はどれも例年に劣らぬ力作ばかりで、「すごい」と思いました。表現力にも卓越し、こちらが「う～ん」という秀作もいくつか見受けられました。一つ残念なのは4、5年生の感想文が皆無に等しかったことでしょうか。

過去に一度以上読んだことのある作品に対する感想文が今回もいくつかありました。感動した映画でも後で見直すと見落としや新発見があって、「あっ」と思って、善かれ悪しかれ作品を自分なりに再評価することが結構ありますよね。未知の作品にチャレンジするのも「わくわく」するかもしれません、映画と違い読書は頭の中に独自の映像を描くことが可能ですよね。だからこそ、過去に一度しか読んだことのない作品に再チャレンジしてみるのも一考ですね。「あっ」という「わくわく」に出会えるかもしれませんよ。

### 一般教育科 濱田 伸生

作品を読んだ皆さん、特に入賞した人達ですが、文章、言葉として語られる話の表層ばかりでなく、文章の行間あるいは背後に存在する作者の心情や心の動きを読み取り、そこに包まれる意味を、各人がそれぞれの方法で理解し分析する力を持っていること、同時にその感想を文章構成できる力を有していることに驚きを覚えました。そしてそれらを自分に照らし、重ね合わせて真摯に生きて行こうとする姿に感動しました。

読書は頭の体操です。これから多くの本を読み幅広い教養と知識を習得し、そして考える力を身に付けて下さい。

### 一般教育科 岩本 晃代

イメージというのは、肉眼では見えないもので、頭の中に、映像あるいは音楽として浮かびあがつてくるものです。文学においては、それを絵画や演奏でなく、言葉で表現します。感想文もそうで、読後に迫ってきた感動を、目に見えるように読者に提示するのです。今年度の入選作品には、そのイメージと、さらには自分の考えを強く押し出しているものが多かったように思いました。自分独自の世界を作り上げていった気迫が伝わってきました。名作を新鮮な気持ちで思い返すことができ、とても頼もしく思います。一つ残念だったのは高学年の作品が少なかったことです。来年はぜひ応募してくださいね。

# 図書館統計

## ■ 平成17年度利用状況

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	24	23	26	23	18	23	25	24	22	21	23	22	274
入館者数 総数	4,662	5,625	7,073	4,977	2,710	6,799	4,618	6,468	5,439	4,782	7,096	2,911	63,160
(内夜間)	861	1,482	1941	879	0	1,541	1,189	1,566	1,209	1,267	1734	81	13,750
(内土曜日)	131	217	487	154	0	303	215	182	288	103	207	0	2,287
1日平均	194.3	244.6	272.0	216.4	150.6	295.6	184.7	269.5	247.2	227.7	308.5	132.3	230.5
貸出冊数 総数	590	798	722	670	247	473	749	889	726	625	511	164	7,164
(内夜間)	162	229	120	118	0	110	121	216	205	159	161	6	1,607
(内土曜日)	67	40	38	58	0	42	38	42	34	35	21	0	415
1日平均	24.6	34.7	27.8	29.1	13.7	20.6	30.0	37.0	33.0	29.8	22.2	7.5	26.1

## ■ 分類別図書貸出冊数の推移

年 度	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	*その他	合計
平成13年度	207	77	192	138	943	2,520	67	443	44	1,376	1,459	7,466
平成14年度	274	92	183	124	929	3,099	96	299	53	946	1,726	7,821
平成15年度	283	70	113	72	907	2,995	34	208	61	924	1,891	7,558
平成16年度	167	109	107	126	815	2,792	30	289	62	1,452	1,896	7,845
平成17年度	148	49	113	93	763	2,618	13	306	9	1,163	1,889	7,164
平均	216	79	142	111	871	2,805	48	309	46	1,172	1,772	7,571

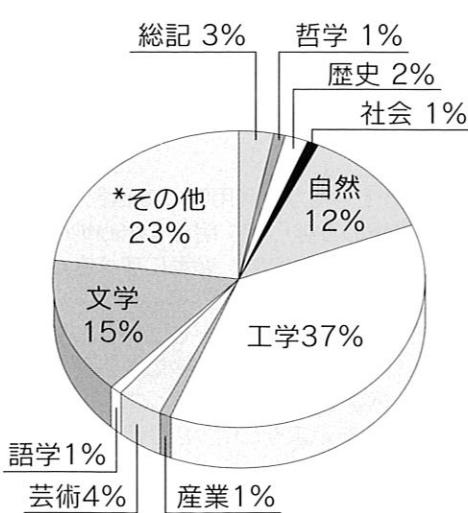
\*「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す。

## ■ 利用状況の推移

年 度	開館日数	利用登録状況				入館者数		貸出冊数			1日当たりの数値		1人当たりの数値		
		総数	(内学生)	(内教職員)	(内学外利用者)	総数	(内夜間) (土曜日)	総数	(内学生のみ) (貸出冊数)	(内夜間) (土曜日)	(内学外利用者)	1日当たり入館者数	1日当たり貸出冊数	学生1人当たり貸出冊数	利用者1人当たり貸出冊数
平成13年度	279	1,304	1,043	187	74	80,735	12,658	7,466	6,815	1,898	87	289.4	26.8	6.5	5.7
平成14年度	277	1,288	1,044	182	62	75,466	14,903	7,894	6,876	1,906	407	272.4	28.5	6.6	6.1
平成15年度	277	1,312	1,065	182	62	71,983	16,145	7,488	6,617	2,393	123	259.9	27.0	6.2	5.7
平成16年度	271	1,300	1,054	182	64	70,630	15,914	7,845	7,670	2,346	175	260.6	28.9	7.3	6.0
平成17年度	274	1,355	1,063	182	110	63,160	16,037	7,164	6,587	2,022	202	230.5	26.1	6.2	5.3

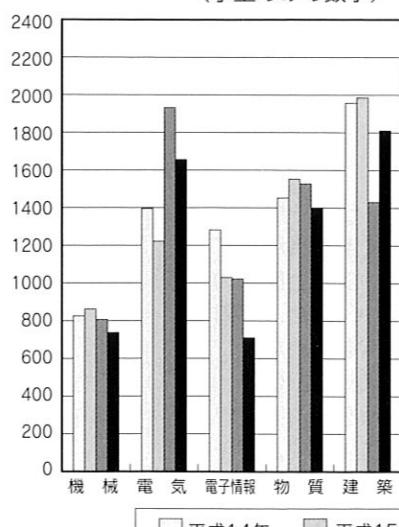
## ■ 分類別貸出冊数

(平成13~17年平均)



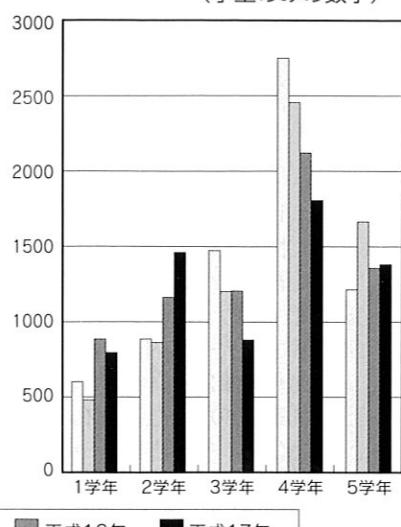
## ■ 学科別図書貸出冊数

(学生のみの数字)



## ■ 学年別図書貸出冊数

(学生のみの数字)



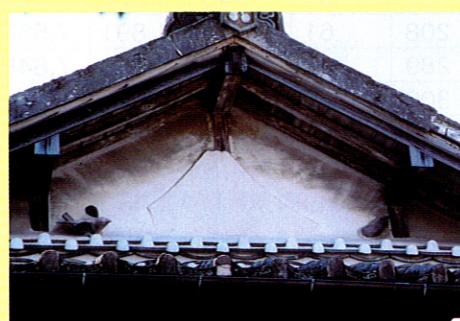
□ 平成14年 ■ 平成15年 ▨ 平成16年 □ 平成17年



八女福島の町並み



離れ正面



妻壁の富士・鷹・茄子



座敷

## 郷土の文化財

八女市指定有形文化財

### 旧木下家(堺屋)住宅離れ

明治41年 福岡県八女市本町184

旧木下家は重要伝統的建造物群保存地区である八女福島（平成14年選定）にあります。八女福島は近世初頭、福島城の城下町として整備され、廃城後も久留米藩内の大きな町として発展してきました。伝統的な町並みの特色の一つである「居蔵」と称されるつくりは天保9年（1838）から現れます。

東京町にある木下家は酒造業等で繁栄し、現在、離れと1号・3号倉庫が残っています。離れは11代目治郎が明治41年（1908）に建立したものです。南北に棟を配した入母屋造で、その3方に下屋を廻し、東面中央部では下屋を葺き降ろして玄関の屋根にしています。北側の白い妻壁には富士山を中心、その左右に鷹と茄子を配しています。

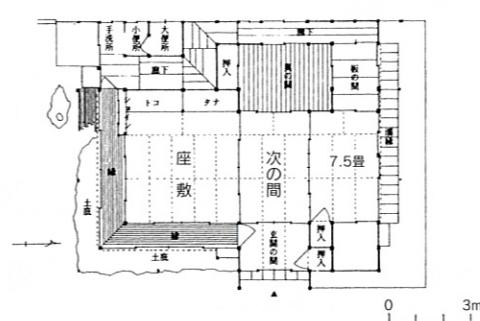
12.5畳の座敷には床の間・違棚・付書院が整えられており、付書院の上部の小壁は富士山型に削りぬかれ、東と南の縁側との境の篭欄間の中で雀が飛び回っています。内法高は6尺と高く、天井は珍しい折上げ天井で、その高さは3.5m弱もあります。次の間でも3.2mの天井高があります。

座敷を含め、畳を敷いている部屋には長押が巡らされ、座敷には折鶴型の釘隠しが用いられ、その他、部屋ごとに異なった意匠の釘隠があります。襖の引手金物にも様々な意匠を見ることができます。

このように離れは、良質な材料を用いながら遊びを取り入れた建築と考えられます。

旧木下家には主屋は残っていませんが、離れと2棟の倉庫で構成された空間に、八女福島の町家における豊かな奥の空間を見ることができます。

（建築学科 松岡高弘）



平面図（旧木下家住宅調査報告書）

## 編集後記

昨年11月に図書館1、2階の美術ギャラリー展示作品を入れ替えました。特に1階は、それまで展示していた絵画をすべて「書」に替えたため、随分と館内の雰囲気が変わったのではないでしょうか。また、図書館1階セミナー室内に、新たに作品展示を始めたり、一般教育科棟2階「文化系展示スペース」において、石炭今昔三池かるた 読札・絵札の展示を期間限定で行ったりと、今までにギャラリーが「旬」です。今後も、美術ギャラリーにご注目ください。

さて、図書館報第12号では、「公共図書館」を特集

してみましたが、いかがでしたか。利用者の満足度アップのために、蔵書の充実のみならず、明るく居心地の良い空間を提供する公共図書館には、参考にすべき点が多くあります。

また、「新任教員推薦図書」のコーナーでは、新しく着任された先生方に、印象に残った本、学生に読ませたい本を推薦していただきました。興味が沸く本があれば、図書館にも揃えてありますので、ぜひ足を運んで手にとってみてください。